

第1章 所沢市の概要

第1節 自然的・地理的環境

1. 位置・面積

本市は、都心から30 km圏内にあり、武蔵野台地のほぼ中央、東京都多摩北部に接する埼玉県南西部に位置しています。北東部は三芳町、北部は狭山市、川越市、北西部は入間市、南部は柳瀬川をはさんで東京都と接しています。市域は東西15.1 km、南北8.9 km、総面積は72.11 km²に及びます。



【出典／第6次所沢市総合計画】

図1-1 首都圏における所沢市の位置



図1-2 埼玉県における所沢市の位置

◆面積・広がり

面積	72.11km ²
東西	15.1km
南北	8.9km

◆市役所の位置

北緯	35° 47' 58"
東経	139° 28' 08"

◆標高

最高	175.1 m (狭山湖西側)
最低	12.0 m (柳瀬川下流)
平均	124.4 m

2. 地名の由来

地名の由来は明らかではありませんが、ヤマノイモ科の植物である「野老^{ところ}」に由来するという説があります。室町時代に都からやってきた高僧が旅の途中で当地に立ち寄り、寺でもてなしを受けた際に「野遊びのさかなに山のいもそへてほりもとめたる野老沢かな」という歌を詠みました。これは、ところざわという地名と肴に出された「山のいも」をかけた歌になっており、地名とこの植物が昔から結び付けて考えられてきたことがわかります。



写真 1-1 野老の葉

3. 地形

本市の地形は、台地と丘陵と低地とに特徴があります。市域の大部分は武蔵野台地上にあり、南西部に狭山丘陵が台地上に浮かぶ島のように存在します。台地の大半は関東ローム層に覆われたローム台地上にあります。また、本市の南端を流れる柳瀬川^{あすま}や東川沿いは谷底低地が形成されています。そして丘陵から流れ出る湧き水が小規模な河川となって、新河岸川水系の東川や柳瀬川等に合流して東部へ流れます。また、狭山丘陵に昭和初年に築造された東京都水道局が所管する人造湖である山口貯水池があります。

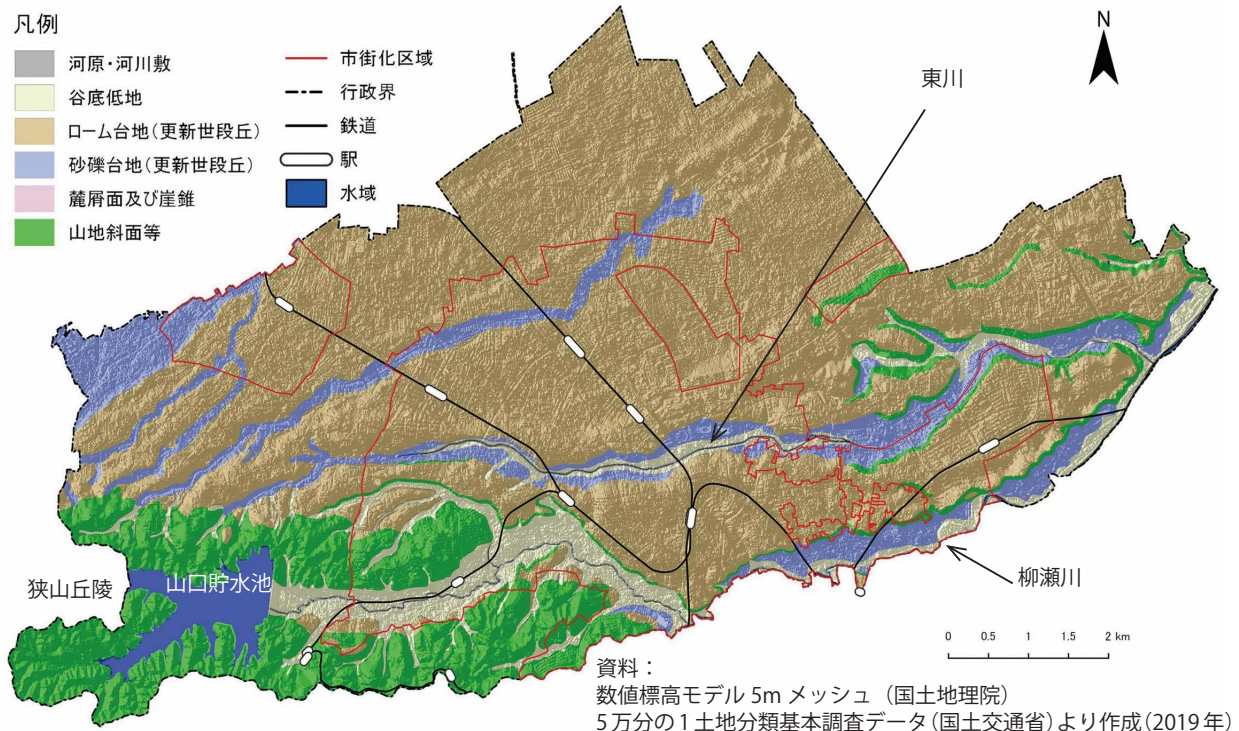


図 1-3 所沢市の地形



写真 1-2 柳瀬川と東川の合流地点



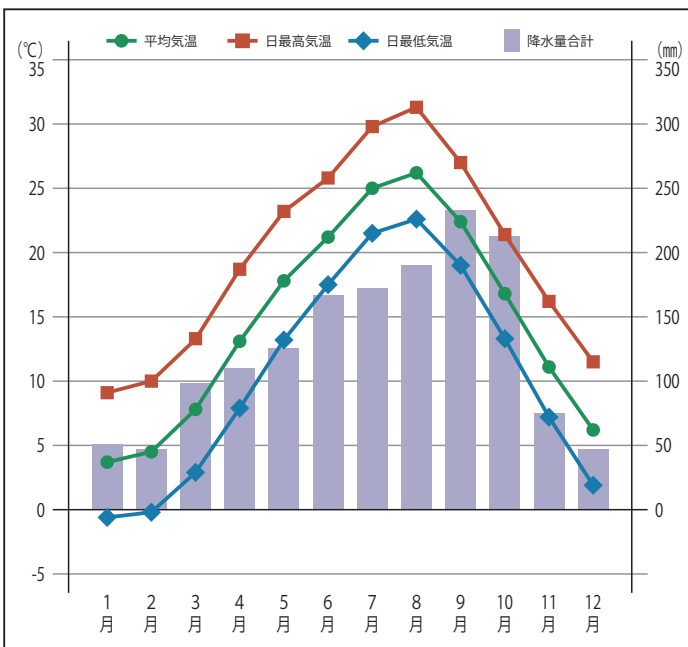
写真 1-3 狭山湖 (山口貯水池)

4. 気候

本市の気候は年間の寒暖差が小さく、平成3（1991）年から令和2（2020）年の30年間の平均気温は14.6℃、年平均降水量は1,529.5mmで、過ごしやすい気候です。

しかし、気候変動や都市化の影響により、首都圏と同様に気温上昇の傾向にあり、地球温暖化が原因と考えられる集中豪雨も頻発化しています。

月	気温			降水量 合計
	平均	日最高	日最低	
1月	3.7	9.1	-0.6	50.9
2月	4.5	10.0	-0.2	47.0
3月	7.8	13.3	2.9	98.3
4月	13.1	18.7	7.9	110.1
5月	17.8	23.2	13.2	125.8
6月	21.2	25.8	17.5	166.7
7月	25.0	29.8	21.5	172.4
8月	26.2	31.3	22.6	190.4
9月	22.4	27.0	19.0	233.2
10月	16.8	21.4	13.3	212.6
11月	11.1	16.2	7.2	75.0
12月	6.2	11.5	1.9	47.3
年	14.6	19.7	10.5	1529.5



【出典／気象庁（観測地点：所沢）】※統計期間は平成3（1991）年～令和2（2020）年

表 1-1・図 1-4 月ごとの平年値（単位／気温：℃、降水量：mm）

コラム

◆市章

（昭和30（1955）年11月3日制定）



三ヶ島村と柳瀬村が所沢市に合併した市制施行5周年に定められたものです。地名の由来にもあり、当地に多く自生していたヤマノイモ科「トコロ」の葉を図案化しました。まわりに三つのワをあしらい、「輪」、「和」をモットーにしたまちづくりへの願いがこめられています。

◆市の木・花・鳥

（昭和48（1973）年に市民の公募により、自然保護思想を高めるために選定されました。）



市の木（いちよう）

扇形をした葉が秋には黄色く染まって散ります。ギンナンと呼ばれる実は食用になります。大気汚染にも強い落葉樹です。



市の花（茶の花）

所沢市は、狭山茶の産地として知られ、初冬には椿に似た小さな白い花を咲かせます。



市の鳥（ひばり）

麦畑などに巣を作り、空中でほがらかにさえずります。畑が多かった昔はよく見かけることができた鳥でした。

5. 自然環境

1) 生物（動物・植物）

令和元（2019）年までに発行された研究論文や報告書などの文献資料から、市内で生息・生育が確認されている生きものをまとめたものが表 1-2 と表 1-3 です。埼玉県内の平野部に位置する自治体の中で、生きものの情報の記録が最も多く、生物多様性に富んだ地域であるといえます。

表 1-2 生きものの確認記録

哺乳類	市域は秩父山地の森林帯との直接のつながりを持たない平野部に位置するため、大型哺乳類の確認例はなく、ホンDIGツネやアナグマ、ホンカヤネズミなどの中・小型哺乳類が記録されています。 アズマモグラ、アブラコウモリ、イエネズミ類は、市内全域に幅広く生息していますが、他の種は自然環境が良好な場所を中心に分布が点在し、なかでも狭山丘陵で確認された全ての哺乳類が記録されています。
鳥類	狭山湖で越冬するカモ・カイツブリ類などの他は水鳥類が少なく、オオタカなどの猛禽類や森林に生息する鳥類が豊かであることが特徴です。
爬虫類	在来種のほとんどが希少種で、ニホンカナヘビ以外の在来種を市内で見える機会は減っています。
両生類	市内に水辺環境が少ないため、アズマヒキガエル、ニホンアマガエルを除き、両生類の生息は狭山丘陵とそこから流れる河川・湿地に限られます。
魚類	魚類が生息する主な水域は、狭山湖と丘陵を水源とする柳瀬川、東川、砂川堀などの河川・水路です。水質汚染や人工護岸化などの影響により、一時はアユやニホウナギなどの回遊魚をはじめ、モツゴ、オイカワなどの河川中流や池で普通に見られた魚が減少しました。近年、水質の改善などにより分布が回復しつつあるとの報告があります。
昆虫類	昆虫の良好な生息地として狭山丘陵が知られ、近年は平地林や河川沿いの観察記録もあります。県内有数の昆虫確認種数を誇る地域である一方、クロシジミ、ツマグロキチョウ、ゲンゴロウなど、すでに姿を消したと報告される昆虫もいます。
植物	狭山丘陵が植物相の豊かな場所として知られ、自然環境の基盤要素として、市内各地の調査も多く行われています。狭山丘陵で森林や湿地の植物の他に山地の植物も見られ、平地林周辺や河川沿いなどで、かつての武蔵野台地に広がっていたカヤ原に由来すると考えられる草地の植物が見られることが植物相の特徴です。

※ミヤコタナゴは、かつて田んぼの用水路などに多く生息していましたが、市内では昭和 50 年代を最後に見つかっていないことから、魚類の欄に記載がありません。

表 1-3 文献資料動植物記録種総括

評価区分 対象分類群		記録種数		重要種区分																外来種区分			備考	
				法令指定種			レッドリスト掲載種													外来種	特定外来生物	防止外来種		
		文化庁	環境省	埼玉県	EX 全国	EW 全国	CR 全国	EN 全国	VU 全国	NT 全国	DD 全国	LP 全国	RT 全県											
動物	哺乳類	10	21								1 (1)	1 (2)				(8)	6	2	6	※1				
	鳥類	53	215	1				1	5	1	6	5	10	6	16	1	2		11	3	2	2		
		繁殖鳥 越冬鳥							1	5	1	6	5	2	6	11 5	1	1		8			※2	
	爬虫類	9	15								1	2	6	1			1	3	1	2				
	両生類	7	12		1				1		2	1	2	2	4				2	1	2			
	魚類	13	35	1	1			1	1	3	3	3	3	2	1				5	1	3			
	昆虫類	278	2,581				1		1	5	6	10	4	17	12	69	6	4	3	8	6	1	2	
	合計	370	2,879	1	1	1		1		3	14	10	18	14	34	23	97	8	7		3	20	25	8

【維管束植物】	シダ類	23	114								7	2	8	1	9							
	種子植物	裸子植物	5	23											1					8		
		被子植物	離弁花類	140	591			4		1	7	1	8	7	8	7	14			114	1	21
			合弁花類	53	356			1			8	2	19	11	13	6	21			84	2	22
			単子葉類	162	368			3		1	9	1	16	7	10	6	30		3		57	
	合計	167	1,452				8		2	24	4	50	27	39	20	75		3		263	3	70

※1（ ）は埼玉県レッドデータブック 2008 動物編のカテゴリー該当種

※2 鳥類の法令指定種・レッドリスト掲載種については、所沢市内で、生息地や生息環境との結びつきを明確に示す「繁殖鳥」及び「越冬鳥」の記録が得られた種を抽出。同一種で繁殖鳥・越冬鳥の両方において埼玉県レッドデータブックにカテゴリー付けされた種については、各1種としてカウント。

■法令指定種 文化庁：天然記念物（文化財保護法）、環境省：国内希少野生動植物種（種の保存法）
埼玉県：県内希少野生動植物種（希少野生動植物保護条例）

■レッドリスト・カテゴリー EX:絶滅、EW:野生絶滅、CR:絶滅危惧ⅠA類、EN:絶滅危惧ⅠB類、VU:絶滅危惧Ⅱ類、NT:準絶滅危惧、DD:情報不足、LP:絶滅の恐れのある地域個体群、RT:地帯別危惧（全県評価）
【環境省：環境省レッドリスト 2019、埼玉県：レッドデータブック植物編 2011、動物編 2018】

■外来種区分 特定外来生物（外来生物法指定種）、生態系被害防止外来種リスト：侵入予防外来種・その他の定着予防外来種・緊急対策外来種・重点対策外来種・その他の総合対策外来種・産業管理外来種

【出典／生物多様性ところざわ戦略】※数値は市で把握する最新のものです

2) 自然公園

広範な狭山丘陵の保全を図るため、埼玉県は県立自然公園条例に基づき、昭和 26（1951）年 3 月、県立狭山自然公園に指定しています。

また、首都圏近郊緑地保全法に基づき、東京都（東村山市・東大和市・武蔵村山市・瑞穂町）と埼玉県（所沢市 642ha・入間市 240ha）の 1,607ha が、昭和 42（1967）年 2 月 16 日から近郊緑地保全区域に指定されています。

【県立自然公園】

・県立狭山自然公園

指定年月日	昭和 26（1951）年 3 月 9 日
関係市町村	所沢市、入間市
公園面積	1,807.8ha
地域区分	全て普通地域

狭山湖（山口貯水池）を囲む丘陵地帯で、湖畔にはサクラ、ツツジが多く、遊園地などがある。アカマツ、クヌギの雑木林に囲まれた狭山湖一帯は、武蔵野の自然が息づいている。

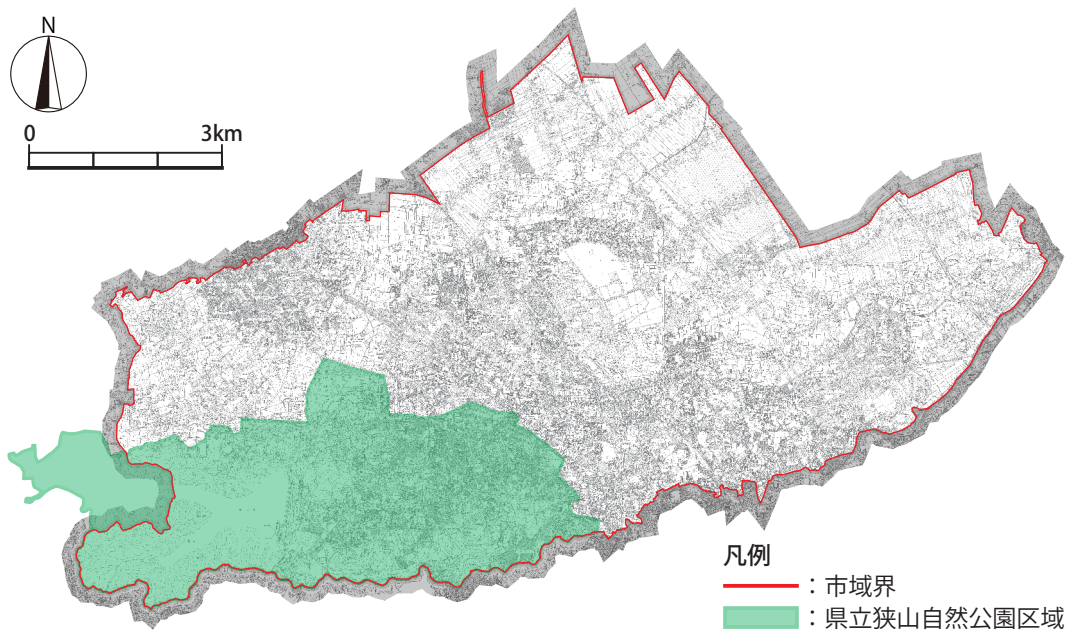


図 1-5 県立狭山自然公園区域図

6. 景観

市内には、狭山丘陵の雑木林や台地上の平地林のほか、市街地の公園緑地や街路樹などのみどりが存在します。このみどりを保全するため、緑地の確保や、保存樹林・保存樹木・ふるさとの樹の指定、市民協働による樹林地管理などを実施しています。

本市の特徴として、狭山丘陵をはじめとするみどりの景観や、所沢駅周辺の中心市街地における昔ながらの街並みと新しい街並みが混在する景観など、様々な表情を持つ景観がある点が挙げられます。

市内の景観の要素である資源を「とことこ景観資源」として登録し、その中から特に所沢らしい良好な景観の形成に資するものとして、狭山丘陵（狭山湖）や三富新田などを「とことこ景観賞」として表彰するなど、良好な景観の積極的な活用を図り、次世代へ継承しています。



写真 1-4 広がる平地林

第2節 社会的状況

1. 人口推移

本市の人口は令和8（2026）年3月末現在、342,857人です。5年ごとに行われる国勢調査結果によると、本市の人口は着実に増加し続け、平成22（2010）年以降は34万人台で推移しています。

年齢構成別の割合は、年少人口（0～14歳）及び生産年齢人口（15～64歳）は減少傾向にあり、老年人口（65歳以上）の割合は増加傾向にあります。平成27（2015）年に老年人口の割合が25.6%となって超高齢化社会に入り、年々その比率が増加しています。

国立社会保障・人口問題研究所の調査結果によると、今後の総人口は減少に移行し、令和32（2050）年に総人口が約30万人になるものと推計され、老年人口の割合が4割近くまで増加すると見込まれます。

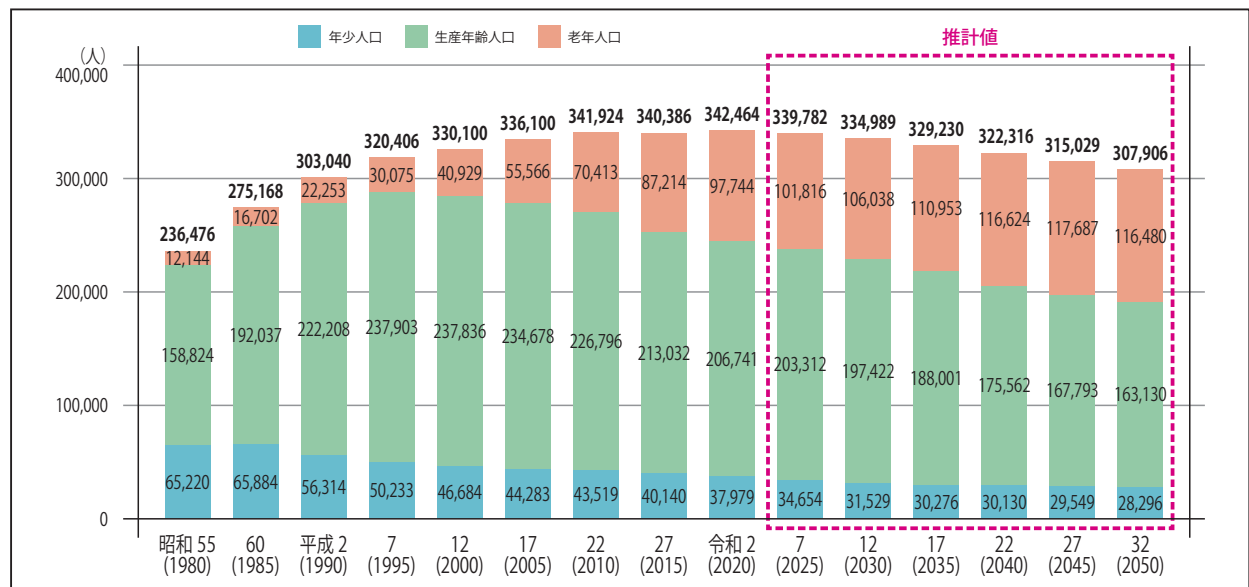


図1-6 人口推移と将来推計人口

【出典／人口：国勢調査、推計人口：国立社会保障・人口問題研究所（令和5（2023）年推計）】

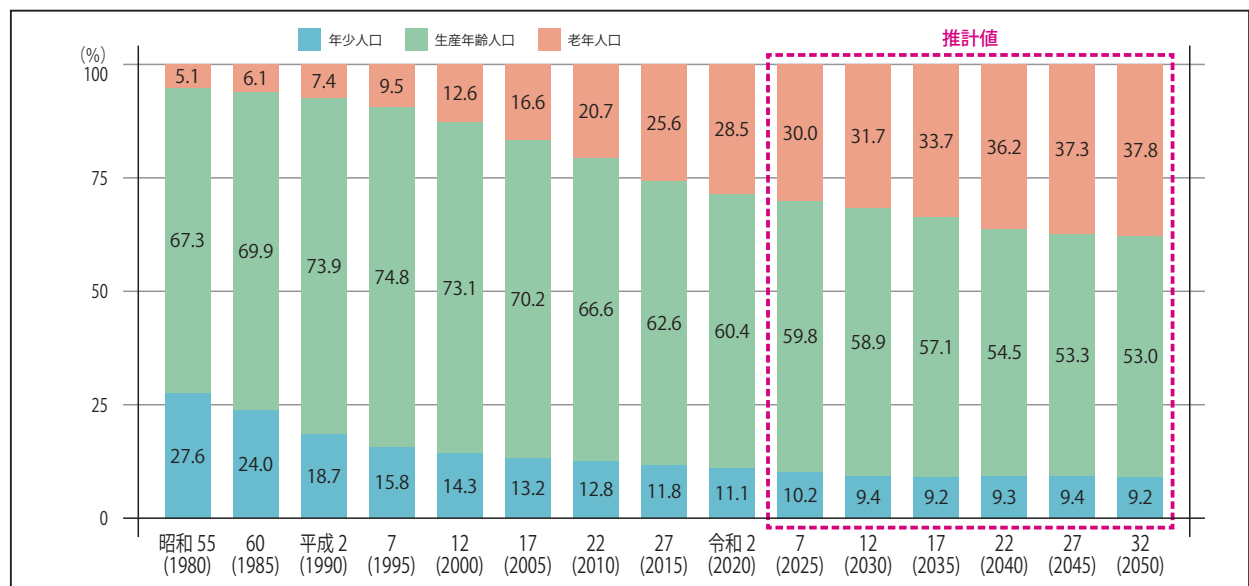


図1-7 年齢3区分別人口割合の推移と将来推計

【出典／人口：国勢調査、推計人口：国立社会保障・人口問題研究所（令和5（2023）年推計）】

2. 土地利用

令和5（2023）年1月現在の本市の地目別土地利用は、宅地が最も多く、全体の35.7%を占め、次いで畑が23.3%です。畑や山林などが減少傾向、宅地が増加傾向にあります。

市域全体が都市計画区域で、4割が市街化区域、6割が市街化調整区域に指定されています。所沢駅や新所沢駅などで、駅を中心とした市街地が形成され、その周辺にみどりが広がっています。市街化区域の90%超を住居系地域に指定している一方、商業系、工業系の用途地域の指定はそれぞれ5%、3%で、県内の他市と比較して少ない状況となっています。



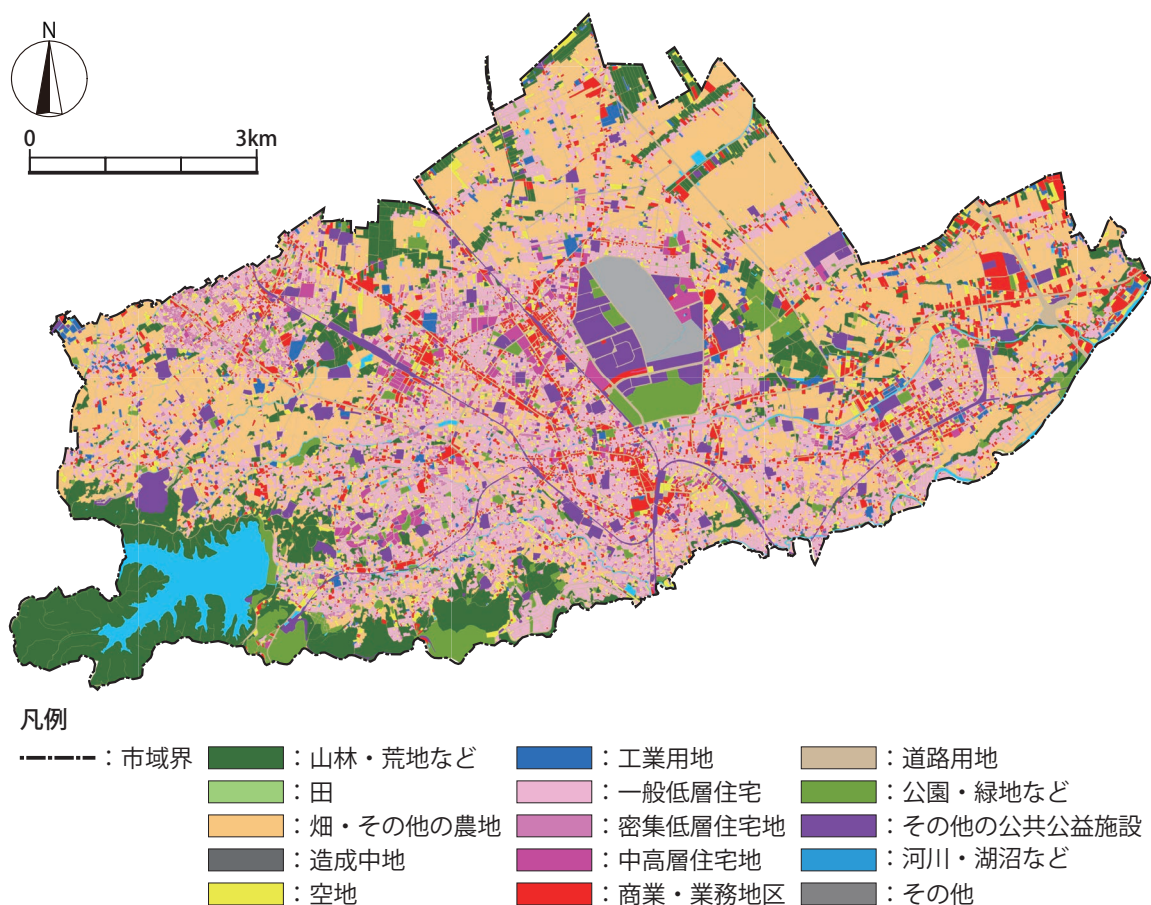
写真 1-5 所沢駅西口開発（エミテラス所沢）

表 1-4 地目別面積

地目	総面積	田	畑	宅地	山林	原野	雑種地	その他
面積 (ha)	7,211.0	4.0	1,679.5	2,577.4	432.3	0.6	731.0	1,786.2
構成比 (%)	100.0	0.1	23.3	35.7	6.0	0.0	10.1	24.8

【出典／所沢市資産税課 令和5（2023）年】

※雑種地は、ゴルフ場、鉄軌道用地等。その他は、道路、河川、その他の公共用地等。



【出典／地理院タイル（数値地図 5000（土地利用）、首都圏 2005 年）を加工して作成】

図 1-8 土地利用図

道路は、中央部を一般国道 463 号が横断し、東部に関越自動車道所沢インターチェンジが位置し、西部に首都圏中央連絡自動車道入間インターチェンジが隣接するなど、交通の要衝となっています。

バスは、鉄道駅を拠点として民間路線バスとコミュニティバス（ところバス・ところワゴン）が運行しており、高齢者、障害者などの日常生活に必要な交通手段となっています。



4. 産業

令和3（2021）年経済センサスによると、本市の事業所は9,582事業所、従業者数は116,328人で、第3次産業が8割を占めています。近年の傾向として事業所数は1万所前後、従業者数は10万人強で推移し、いずれも平成21（2009）年時点から減少しています。

農業は、県内有数の農業産出額ですが、農地面積は年々減少しています。経営耕地面積のほとんどが畑で、作付は茶（狭山茶）、野菜類（ほうれん草・人参）、いも類（さといも）が中心です。

工業は、製造業の事業所数及び製品出荷額ともに減少傾向にあります。

商業は、事業所数は減少傾向が続いていますが、従業者数は平成24（2012）年以降増加に転じています。年間商品販売額は横ばいでしたが、所沢駅周辺の令和2（2020）年以降の大型商業施設開業により、今後は拡大することが見込まれます。

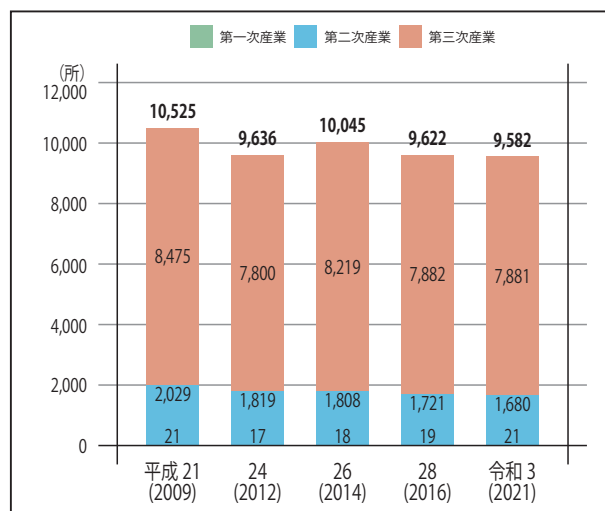


図 1-11 事業所の推移

【出典／総務省・経済産業省「経済センサス」】

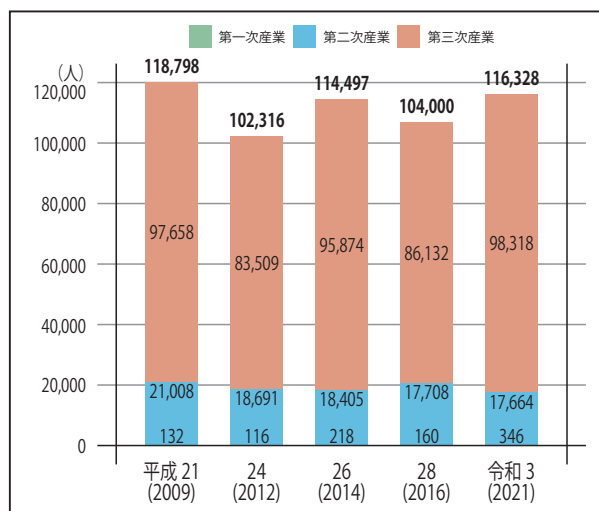


図 1-12 従業者数の推移

【出典／総務省・経済産業省「経済センサス」】

コラム

地場産業

かつて本市の地場産業といえば、織物、養蚕、竹細工、雛人形、押絵羽子板でした。農業中心だった本市域は、農間余業としてこれらの物産が生産され、町場には織物の集荷・取引を行う商人が軒を連ねていました。このような状況が大きく変化したのは第二次世界大戦後です。住宅都市化した市域は農業世帯が減少し、織物や竹細工は、安価な代替品の流入や機械化により、激減しました。

東京近郊という立地と鉄道や高速道路の発達により、本市に事業所を構える企業も増えました。中には優れた技術力とブランド力を持つ事業者もあり、地域を牽引する存在として注目されています。



写真 1-6 押絵羽子板の面相師



写真 1-7 竹細工職人



写真 1-8 ビクセン(天体望遠鏡)



写真 1-9 ミケ島製作所(自転車ペダル)

5. 観光

平成30（2018）年は年間609万人の観光客が訪れていましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、令和2（2020）年は250万人まで減少しました。観光地点は大きな減少が見られなかったものの、イベント関連が令和元（2019）年の333万人から令和2（2020）年に39万人となり、9割弱の減少となったことが要因です。

令和4（2022）年は、過去2年間で感染防止対策と環境整備が進み、行動制限の全面解除や全国旅行支援などの観光需要喚起策によって、観光客が700万人を超えました。ただし、内訳を見ると、イベント関連は開催自粛等により250万人余りに留まる一方、観光地点はこれまでで最高の490万人近くに達しています。この要因は、令和2（2020）年に「ところざわサクラタウン」が開業した影響が大きいものと考えられます。

表 1-5 所沢市観光入込客数（単位：人）

年	観光地点	イベント	合計
平成26（2014）年	2,451,082	3,138,987	5,590,069
平成27（2015）年	2,861,294	3,227,337	6,088,631
平成28（2016）年	2,489,935	3,012,583	5,502,518
平成29（2017）年	2,271,626	3,255,966	5,527,592
平成30（2018）年	2,199,387	3,891,822	6,091,209
令和元（2019）年	2,643,857	3,329,327	5,973,184
令和2（2020）年	2,115,860	386,849	2,502,709
令和3（2021）年	3,833,720	930,059	4,763,779
令和4（2022）年	4,863,516	2,582,216	7,445,732
令和5（2023）年	5,189,871	3,050,806	8,240,677
令和6（2024）年	4,871,172	2,894,396	7,765,568

【出典：埼玉県観光入込客数統計調査】



写真 1-10 所沢市観光情報・物産館 YOT-TOKO



写真 1-11 ところざわサクラタウン

6. 文化財関連施設

本市に所在する文化財関連施設、収蔵施設を以下に整理しました。

表 1-6 所沢市の文化財関連施設

番号	施設名	開設年	所在地	概要
1	所沢市生涯学習推進センター 文化財保護課	平成21年 (2009)	並木 6-4-1	常設展示室、企画展示室、閲覧 学習室、資料保管室ほか。
2	所沢市立埋蔵文化財調査センター	平成6年 (1994)	北野 2-12-1	市内で発掘された埋蔵文化財の 整理、保管、展示など。
3	所沢市中富民俗資料館	昭和56年 (1981)	中富 1548-1	富岡地区で使用された衣食住生 業用具など展示。月4日開館。
4	所沢市柳瀬民俗資料館	昭和60年 (1985)	亀ヶ谷 279-3	柳瀬地区で使用された衣食住生 業用具など展示。月4日開館。
5	所沢市山口民俗資料館	平成7年 (1995)	山口 1529-10	山口地区で使用された衣食住生 業用具など展示。月4日開館。

6	三ヶ島まちづくりセンター内 三ヶ島葎子資料室	平成6年 (1994)	三ヶ島 5-1639-1	所沢出身の歌人三ヶ島葎子の資料を展示公開。
7	所沢航空発祥記念館	平成5年 (1993)	並木 1-13	航空発祥の地を記念し航空のあゆみ展示や飛ぶ仕組みを学べる。
8	狭山丘陵 いきものふれあいの里センター	平成6年 (1994)	荒幡 782	自然の大切さや自然と人との関わりを考える自然の展示施設。
9	黄林閣（国指定重要文化財） ※柳瀬荘の建物の一つ	—	坂之下 437	電力の鬼、松永安左工門の別荘だった建物。東京国立博物館所有。
10	小野家住宅（国指定重要文化財）	—	林 2-426-1	武蔵野の開拓農家を伝える民家。個人所有。毎週日曜公開。
11	所沢郷土美術館（国登録有形文化財「所沢郷土美術館主屋」ほか）	昭和53年 (1978)	久米 1447-1	所沢ゆかりの芸術家作品を展示した私設の美術館。公開日限定。
12	クロスケの家（国登録有形文化財「旧和田家住宅（クロスケの家）主屋」ほか）	平成23年 (2011)	三ヶ島 3-1169-1	公益財団法人トトロのふるさと基金の事務所兼活動拠点施設。
13	野老澤町造商店（市指定文化財「明治天皇行在所跡」）	平成20年 (2008)	元町 21-18	齋藤家の見世蔵を利用した中心市街地活性化拠点施設。
14	秋田家住宅（国登録有形文化財）	—	寿町 29-7	かつて隆盛を極めた所沢織物の綿糸商の建物。公開日限定。「所沢市寿町歴史的建造物整備活用基本方針」を踏まえた整備活用事業を実施。
15	角川武蔵野ミュージアム	令和2年 (2020)	東所沢和田 3-31-3	図書、美術、博物が融合した複合文化施設。武蔵野回廊は特徴。

表 1-7 所沢市の収蔵施設

番号	施設名	収蔵資料
1	所沢市生涯学習推進センター文化財保護課	民俗資料、古文書、マイクロフィルム、焼付製本、写真、図書・行政刊行物、新聞資料、地図、航空写真ほか
2	所沢市立埋蔵文化財調査センター	出土遺物、写真、調査記録ほか
3	歴史的建造物解体部材保管庫	中心市街地で解体された建造物の部材ほか
4	若狭保管庫	歴史的建造物部材、民俗資料ほか



写真 1-12 所沢市生涯学習推進センター文化財保護課（常設展示室）



写真 1-13 所沢市中富民俗資料館

7. 災害

1) 災害の履歴

過去、本市に被害をもたらした災害を以下に整理しました。

表 1-8 所沢市における災害の履歴

所沢市周辺で発生した地震被害

番号	発生年	概要	主な被害
1	慶安 2 (1649) 年	川越を震央とした M7.1 (7月) 及び M6.4 (9月) の地震	
2	元禄 16 (1703) 年	元禄地震	
3	寛政 2 (1790) 年	川越・蕨を震央とした M6.0 ～ 6.5 の地震	
4	安政 2 (1855) 年	江戸地震	
5	安政 6 (1859) 年	立川・多摩を震央とした M6.3 の地震	
6	大正 12 (1923) 年	関東大震災	死者 1 人、建物損壊 1 棟
7	昭和 6 (1931) 年	西埼玉地震、M6.9	
8	昭和 43 (1968) 年	埼玉県中部を震央とした M6.1 の地震	
9	平成 23 (2011) 年	東北地方太平洋沖地震 (東日本大震災)	軽傷者 2 名、住家の一部破損 31 棟

所沢市周辺で発生した火災

番号	発生年	概要	主な被害
1	文政元 (1818) 年	所沢上町で火災	
2	文政 10 (1827) 年	所沢浦町で火災	
3	天保 9 (1838) 年	所沢河原宿で火災	
4	文久元 (1861) 年	所沢で火災	24 軒類焼
5	明治 8 (1875) 年	所沢村大火	家屋 51 軒ほか焼失
6	明治 18 (1885) 年	所沢浦町大火	62 軒焼失
7	大正 7 (1918) 年	所沢で 10 棟焼く	
8	昭和 20 (1945) 年	所沢で空襲による火災	14 棟
9	昭和 44 (1969) 年	日吉町東宝映画館ほか火災	3,410㎡全焼
10	昭和 44 (1969) 年	新所沢駅西友ストア火災	1,976㎡焼失

所沢市で発生した洪水・土砂災害 (比較的被害の大きいもの)

番号	年月日	概要	主な被害
1	昭和 41 (1966) 年 9月25日	台風第 26 号 風水害	人的被害：負傷者 4 名 家屋被害：全壊 95 棟、半壊 341 棟、一部破損 1,530 棟、床上浸水 4 棟 その他：道路破損 8 か所、崖くずれ 9 か所、橋梁流失 9 か所 河川氾濫：柳瀬川、東川、砂川堀、不老川
2	昭和 54 (1979) 年 10月19日	台風第 20 号 風水害	人的被害：死者 1 名、負傷者 7 名 家屋被害：全壊 8 棟、半壊 14 棟、一部破損 79 棟、床上浸水 3 棟、床下浸水 4 棟 その他：文教施設被害 27 棟、道路冠水 4 か所
3	平成 28 (2016) 年 8月22日	台風第 9 号 風水害	人的被害：負傷者 1 名 家屋被害：全壊 1 棟、大規模半壊 2 棟、半壊 1 棟、一部損壊 9 棟、床上浸水 119 棟、床下浸水など 483 棟 その他：道路冠水 (冠水・陥没など) 19 か所、護岸崩壊 12 か所、公共施設被害 91 か所、下水道施設被害 31 か所、土砂崩れ 3 か所
4	令和元 (2019) 年 10月12日	台風 19 号 風水害	人的被害：避難者 (指定避難所) 852 名 家屋被害：床上浸水 13 棟、床下浸水 158 棟 その他：道路冠水 13 件、停電 300 件、風害 (倒木・飛来物など) 13 件、土砂崩れ 1 件 河川氾濫：柳瀬川、東川

所沢市で発生した突風災害

番号	年月日	概要	主な被害
1	平成 18 (2006) 年 5 月 20 日	竜巻	住家一部損壊 41 棟
2	令和 4 (2022) 年 6 月 12 日	突風	屋根瓦の破損

所沢市で発生した雪害

番号	年月日	概要	主な被害
1	平成 26 (2014) 年 2 月 8～9 日、14～15 日	大雪	農作物の被害、カーポートや家屋などの物的被害 交通事故 16 件を含む救急搬送 67 件の人的被害

【参考／（地震被害、洪水・土砂災害、突風災害、雪害）所沢市防災会議：「所沢市地域防災計画」、2023.4
（火災）『所沢市史ダイジェスト版 ところざわ歴史物語 増補改訂版』、2020.11】

2) 想定される災害

【地震】

埼玉県地震被害想定調査（平成 24・25 年度）において、本市に最大の被害が予測されている想定地震は立川断層帯地震（M7.4）で、この地震を本市の減災を考える上での想定地震に位置づけています。

調査時点における立川断層帯地震の地震発生確率は、今後 30 年以内に 0.5～2%です。

立川断層帯地震が発生した場合の震度は、市内の大部分で 6 弱、最大で 6 強と予測されており、建物の全半壊は約 6,000 棟、火災による焼失は最大 779 棟と想定しています。なお、液状化の可能性は、市全域で極めて低いと予測されています。

【洪水浸水】

埼玉県管理の主要な河川について想定最大規模の降雨で氾濫した場合の浸水想定が行われています。市内に新河岸川水系の柳瀬川、東川、不老川^{ふろう}の浸水区域が分布し、想定最大規模の降雨量は新河岸川流域の 2 日間雨量 746mm が想定されています。

浸水想定範囲並びに洪水避難所は、「所沢市洪水ハザードマップ」に示しています。

【土砂災害】

市内には土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律により、警戒避難体制を整備すべき土砂災害警戒区域が 48 箇所指定されており、そのうち 37 箇所は、同法により建築構造等が規制される土砂災害特別警戒区域に指定されています。これらの区域の土砂災害の種類は急傾斜地の崩壊（がけ崩れ）で、狭山丘陵や柳瀬川沿いの段丘崖に分布しています。

具体的な区域は、「所沢市土砂災害ハザードマップ」に示しています。

【火山災害】

内閣府は、富士山山頂又はその周辺で噴火が想定される地域で、宝永規模（1707 年の噴火）の大噴火が発生した場合に降り積もる火山灰の厚さの分布を予測しています。

市内では 2～10cm 程度の厚さの降灰が予想され、風向きによってはそれ以上の厚さとなるおそれがあります。降灰による影響は、交通支障、停電、断水のほか、目や気管などの健康被害もあります。



<https://www.city.tokorozawa.saitama.jp/kurashi/seikatukankyo/kankyohozen/kasen/kouzuihazardmap.html>



<https://www.city.tokorozawa.saitama.jp/moshimo/bosai/saigaisona1/saigaisona4/bousai20160520102655180.html>

第3節 歴史的背景

1. 原始・古代

遺跡にみる大昔の所沢

移動生活と石器製造 旧石器時代は現在より気温が低く、大型動物を狩猟しながらの移動生活でした。所沢市の位置する武蔵野台地では、後期旧石器時代から生活痕跡が確認できます。市内で最も古い遺跡は、三ヶ島地区に所在するお伊勢山遺跡（約3万年前）ですが、市域に所在する旧石器時代の遺跡として、全国的に最も有名なものは、同地区に所在する砂川遺跡（約2万年前）です。砂川遺跡では、石器全ての出土地点を記録し、その接合を試みることで、石器の製作工程と当時の人々が移動しながら生活していたことが実証され、出土した石器類は、「埼玉県砂川遺跡出土品」（明治大学所蔵）として、国の重要文化財に指定されています。

縄文人の生活 気候が温暖化したことで、森が広がりシカやイノシシなどの小型の動物や木の実などの食料を得ていました。また、食材を土器で煮炊きするようになったことで、食料の幅が広がりました。市内では縄文時代早期（約7千年前）の遺跡が最も古く、市内西部から中央部の柳瀬川沿いに点在しています。市内に最も多く分布しているのは縄文時代中期（約5千年前）の遺跡です。市指定史跡の膳棚遺跡^{ぜんだな}をはじめ多くの集落遺跡が狭山丘陵周辺の台地部から柳瀬川沿いに帯状に所在します。後期以降は遺跡は多くは見つかりません。

稲作文化の到来 柳瀬川流域の低地で小規模ながら稲作が行われていたようです。吾妻地区^{あづま}の東の上遺跡^{うえ}で、竪穴式住居とともに首長が葬られた方形周溝墓が3基見つかりました。

権力者の登場 山口地区や小手指地区で小豪族の首長を葬ったと思われる古墳（円墳）が、吾妻地区や柳瀬地区で崖面に横穴を掘った横穴墓が見つかりました。また、勾玉や切子玉、ガラス小玉、鉄製の刀や鏃^{やじり}、耳環、須恵器などの副葬品が出土しています。

東山道武蔵路が通る 吾妻地区の東の上遺跡^{うえ}は、竪穴建物跡300棟以上、掘立柱建物跡80棟以上のほかに、漆紙文書や炭化米、鉄製の馬具や焼印、帯金具、馬の歯などが出土しています。また、都と武蔵国府（現在の東京都府中市）を結ぶ東山道武蔵路が見つかり、一般の集落では見られない遺物や道路遺構から交通の要衝であったと考えられます。



写真 1-14 砂川遺跡出土ナイフ形石器



写真 1-15 縄文土器（和田遺跡）



写真 1-16 東山道武蔵路
（南陵中学校校庭）

2. 中世

武蔵武士と戦乱の時代

武士と城館跡 平安時代末、貴族に代わって武士が台頭しました。市域に山口氏と名乗る武蔵武士の一族が現れ、山口城や根古屋城を築きました。やがて、戦国時代に柳瀬地区に滝の城が築かれました。関東管領山内上杉氏の家臣の大石氏によって築かれたと言われていますが、最近の研究では南関東に勢力を有していた扇谷上杉氏によって築城されたという説もあります。その後、相模国から進出してきた小田原北条氏との間で勢力を争い、滝の城は小田原北条氏が支配しました。しかし、天正 18（1590）年、天下統一を図る豊臣秀吉に敗れた後、関東に徳川家康が入りました。

鎌倉街道と小手指ヶ原 源頼朝が鎌倉を本拠地とすると、東国の各地から鎌倉へ向かう道が発達しました。市内には群馬県方面と鎌倉を結ぶ鎌倉街道 上道と呼ばれる道が通り、街道沿いの小手指ヶ原は鎌倉幕府倒幕の兵を挙げた新田義貞と幕府軍による元弘 3（1333）年の合戦をはじめ、何度も戦いの舞台となりました。



写真 1-17 小手指ヶ原古戦場跡の碑



写真 1-18 滝の城跡

3. 近世

江戸時代のはじまり

徳川家康の江戸入りと所沢 天正 18（1590）年、関東の支配者となった徳川家康は、江戸城を本拠とし、江戸近郊の村を領地として家臣に与えました。村の農民はこうした領主に米などの年貢を納めました。市内の村の多くは、旗本と呼ばれるこのような中級武士の領地と、幕府が直接支配して年貢を取る幕府領でした。

江戸時代はじめの村々 この頃、市域の村は狭山丘陵や柳瀬川沿いの南寄りだけに分布していました。当時の技術では、丘陵の谷あいから流れ出る小さな川や柳瀬川の水を利用できる場所でなければ、生活することが難しかったからです。北寄りの台地は草が生い茂り、人々はそれを刈って肥料や飼料として利用していました。



写真 1-19 旗本宇佐美家・久貝家の墓

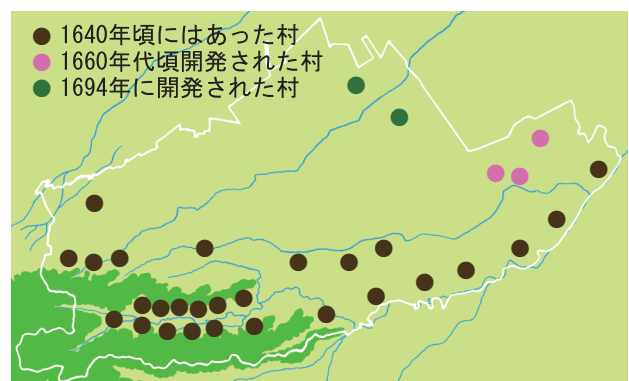


図 1-15 旧村の位置図

切り開かれる武蔵野と農業

三富新田の開発 幕府や藩などの領主層は、年貢を増やすため、まだ耕作されていない台地の開発を考えるようになりました。川越藩主の柳沢吉保が手掛けた三富の開発もその一つです。市域の中富と下富、三芳町の上富を合わせて「三富」と呼ばれる地域の開発は、元禄7（1694）年に始まりました。土地は屋敷と畑と平地林が並んだ細長い短冊形に区切られ、入植した農民に与えられました。

武蔵野新田開発 江戸時代中期以降、幕府の財政の悪化につれ新田の開発はさらに熱心に進められました。武蔵野台地一円を対象とした新田開発で、残っていた場所もほとんどが畑となりました。開発は村ごとに割り当てられ、開かれた新田にはその村の名が付きました。中には裕福な個人が開発を肩代わりし、その姓で呼ばれるようになった新田もありました。畑の後背にクヌギやコナラなどを植え、落葉は肥料として、樹木は薪炭として使いました。

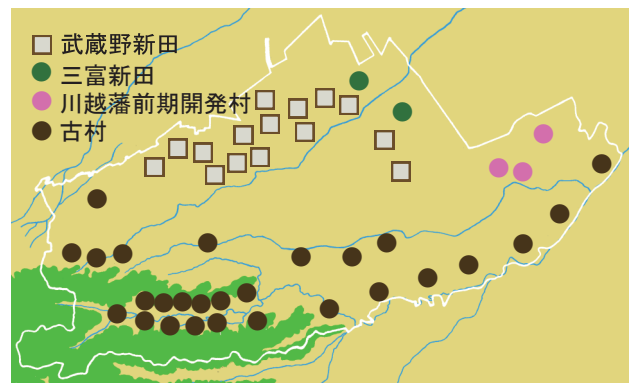


図 1-16 新田開発村々の位置図

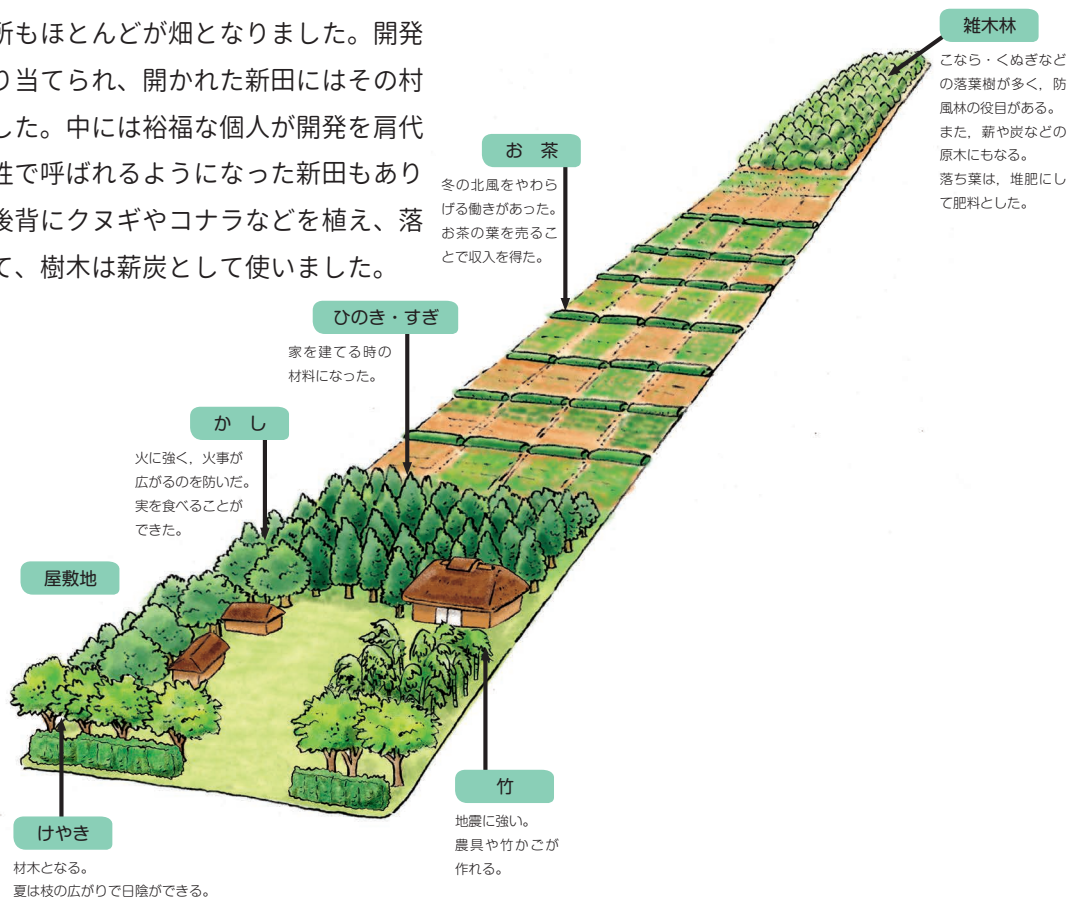


図 1-17 三富新田

丘陵の農業・台地の農業 水が不便な所沢で農業の中心は畑でした。川沿いや丘陵の谷戸に水田も作られましたが、水が十分ではないためごく小規模なものでした。肥料は、草や落ち葉を発酵させたり燃やしたりして灰にしたものが用いられ、やがて購入されるようになりました。武蔵野新田など台地上の畑は、土地がやせて水も思うように得られず、耕作は苦労が付きものでした。寛延4（1751）年、やせた土地でも栽培できる作物として、柳瀬地区のさつま芋の栽培が始まりました。



写真 1-20 さつま芋

三八市と所沢の町場

町場の繁栄 所沢の町場は、古くは南北に伸びる鎌倉街道沿いに発達し、江戸に幕府が開かれると、集落の中心は東西に伸びる江戸街道沿いに移りました。道が集まる交通の要衝は、日用品を買ったり農作物を売ったりする「市」が開かれ、近隣の農村の経済的な中心となりました。所沢の市は三と八のつく日付に月6回開催され、三八の市と呼ばれました。穀物や炭、肥料など生活必需品のほか、江戸時代後期には綿織物の取引などでにぎわい、有力商人が何人も現れました。

幕末の動乱 幕末、開国により国内の物価が上がる一方で、生糸などの輸出で富を蓄えた商人もあり貧富の格差への不満から、富裕な商人や農家を対象とした打ちこわしが起こりました。慶応2（1866）年の武州世直し一揆は、所沢の町場の商家をはじめ、柳瀬地区や松井地区でも蔵や家屋をこわされる被害がありました。

商人の活躍と文化人の輩出 所沢の町場には多くの有力商人がいました。「関八州富貴長者鑑」という富豪番付にも掲載された酒造・米穀商の三上半次郎、織物商の油屋こと向山小平次、江戸商人と渡り合った薪炭商の齊藤武左衛門などです。一方で、繁栄した町場からは文化人も多く出ました。将棋の福泉藤吉・大矢東吉、絵師の三上文筈、お囃子の創始者である古谷重松などです。彼らは、江戸や所沢周辺の在地の文化に影響を与えました。



写真 1-21
打ちこわしによる柱のきず

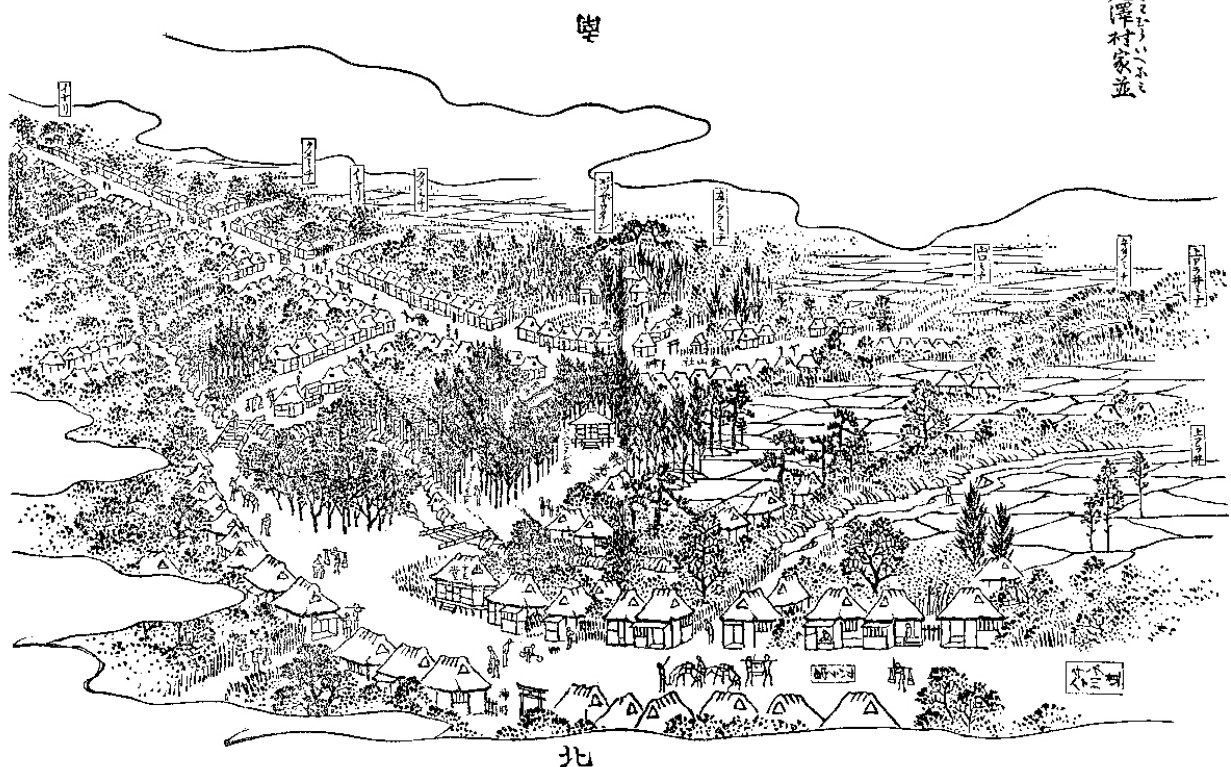


図 1-18 野老澤村家並図（「武蔵野話」挿絵）

4. 近代

明治維新と繁栄への道のり

新しい時代と所沢の村々 明治維新により社会の体制は大きく変わりました。明治4（1871）年の廃藩置県後、市域の村々は入間県、熊谷県を経て埼玉県となりました。人口規模の小さい新田の村々は合併を求められ、北岩岡・北中・神米金などの地名はこの時生まれました。明治22（1889）年以降、制度の改定によってさらに合併が進み、現在の地区のもととなる柳瀬・松井・富岡・小手指・三ヶ島・吾妻・山口の各村が誕生します。これより先、明治14（1881）年に所沢村は所沢町と名称を改めました。所沢町には郵便局、警察署などが新たに設けられ、消防組の



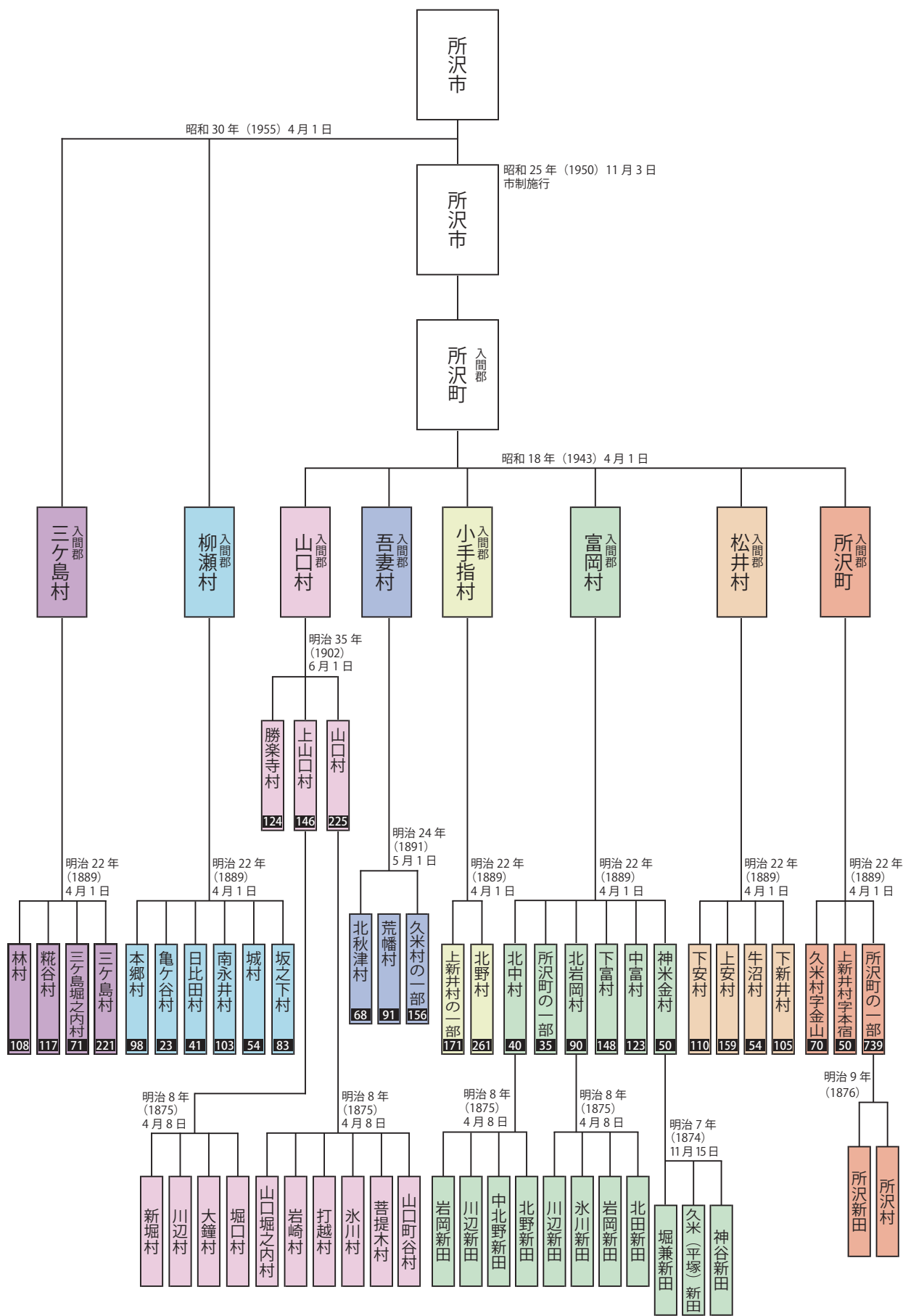
図 1-19 明治時代初期の町村配置図

所沢織物 江戸時代後半、狭山丘陵周辺の農村で、農家の副業として緋などの織物が盛んに織られました。これらの織物は、所沢の三八の市で取り引きされ、所沢織物の名で知られるようになりました。所沢織物は、幕末から明治時代にかけて、輸入糸の導入や高機^{たかばた}の普及などにより生産量が増え、明治時代中期に最盛期を迎えます。所沢町には買継商、糸商などの商家が建ち並び、織物の町となりました。

鉄道の開通 所沢駅は、川越鉄道（現在の西武新宿線・国分寺線）の駅として明治 28（1895）年に開設されました。大正 4（1915）年に、現在の西武池袋線の前身である武蔵野鉄道が開通して所沢駅と接続され、小手指駅（現在の西所沢駅）、元狹山駅（現在の狹山ヶ丘駅）も新設されました。鉄道の開通は、その後の町の発展に大きな役割を果たしていきます。



写真 1-22 川越鉄道開通屏風



■ 合併成立時の戸数 ※境界の一部変更は割愛しています。

図1-20 町村合併図

飛行場の開設と戦争の時代

所沢飛行場の開設 所沢市は、日本で初めて飛行場が開設されたことから「航空発祥の地」と呼ばれています。所沢が飛行場の場所として選ばれたのは、土地の起伏が少なく落雷の危険が少なかったなど諸説ありますが、東京近郊で広大な土地があり鉄道が敷かれていたことも大きな理由と考えられます。明治44（1911）年4月5日、徳川^{よしとし}好敏大尉が操縦するアンリ・ファルマン機と日野熊蔵大尉操縦のライト機により、所沢における初飛行が成功しました。一方で、初の航空機事故も当地で発生しました。大正2（1913）年3月東京での飛行披露を終えた木村・徳田両中尉は所沢飛行場に戻る手前松井村地内で墜落し日本初の航空機事故犠牲者となりました。その後も、フォール大佐を団長とするフランス航空教育団の来日や航空学校の設立などがありました。所沢飛行場はその後3回拡張され、昭和20（1945）年までに面積は当初の5倍近くになりました。近代の所沢の繁栄は飛行場と密接に結びつき、「飛行場の町」として知られるようになりました。

戦争と所沢 明治6（1873）年に徴兵制が実施され、国民皆兵主義の体制が徹底されました。日清戦争や日露戦争など、国家の戦争に市域からも大勢が動員されました。中でも最大の規模は第二次世界大戦（日中戦争・太平洋戦争）で、出征者は約5,000名、戦没者は1,311名を数えました。軍事施設を抱えた所沢は空襲があり、死者が出ました。生活物資は配給制となり、日々の暮らしは圧迫の一途をたどりしました。

1町5村の合併 戦争のただ中の昭和18（1943）年、戦時体制を支えるため、所沢町、松井村、山口村、吾妻村、小手指村、富岡村の1町5村が合併しました。三ヶ島村と柳瀬村は独立のまま残り、この状態で昭和20（1945）年の終戦と新しい時代の到来を迎えることになります。

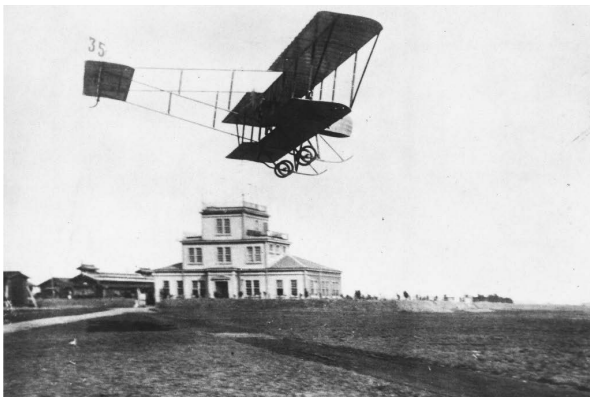


写真 1-23 所沢飛行場



写真 1-24 所沢飛行場（空撮）



写真 1-25 料亭「婦多佳美」での防火訓練



写真 1-26 衣料切符

山口貯水池と地場産業

山口貯水池建設 狭山丘陵内が村域にあたる山口村（当時）は、その一部が大正時代末に東京市（当時）の上水道拡張事業として計画された貯水池建設の対象地となりました。対象地に住居していた山口村を含む5村の282軒は周辺に移転せざるを得ず、これを機に当地で盛んであった稲作や織物などの生業に見切りをつける農家がほとんどでした。工事は昭和4（1929）年に着工し、同7（1932）年に通水式が挙行されました。人造湖の容積は先に建設された村山貯水池の1.4倍の大きさでした。終戦後は、愛称募集により「狭山湖」が選ばれました。周辺は、西武鉄道や狭山貯水池愛護会により観光地化がはかられました。



写真 1-27 山口貯水池建設

地場産業の動向 所沢織物は明治時代末までに紺紵の生産が伸び「所沢紵（ところざわかしり）^{ところざわかしり}」として流通し、その後「湖月」などの新商品が生み出されました。しかし、洋装の普及、織物不況、産地間競争の激化により昭和時代に入り低迷していきました。織物以外は、茶、雛人形の生産、養蚕が盛んに行われました。茶は「狭山茶」のブランドを冠し、大正時代に製茶機械を導入して、本市の茶産地は県内上位を誇



写真 1-28 茶摘み

りました。養蚕は、明治20年代以降、繭の出荷量が増えました。先進地から指導者を招いて技術の習得に努め、地域によっては明治20年代に養蚕伝習所を設立するなどし、昭和初年に桑畑と繭の生産がピークに達しました。養蚕の産物として、繭をはじめ、繭から作られる生糸、真綿、絹織物がありました。雛人形や押絵羽子板の生産は江戸時代から記録が残されており、大正時代から昭和戦前期にかけて県内でも有数の産地となりました。このほか、松井地区では農家の副業として竹細工の生産が盛んに行われ、地名から「安松ざる」と称されて周辺に流通していました。



写真 1-29 機織り（旧勝楽寺村）



写真 1-30 雛人形づくり

5. 現代

戦後から現代へ

米軍基地と開拓事業 昭和 20（1945）年 8 月、敗戦と同時に所沢飛行場は米軍に接收され、在日米軍基地として使用されました。しかし全ての敷地が接收されたわけではなく、接收されなかった土地は終戦による失業と差し迫る食糧不足への対策として、国や県の開拓事業の対象となり、元軍勤務者や周辺の農民が農地の開拓を進めました。市内で、このほかに松井地区と柳瀬地区の一部や三ヶ島地区の一部地域で開拓が進みました。終戦による失業と、差し迫る食糧不足への対策として、国や県はこのような開拓事業を推進し、市内では松井地区や柳瀬地区、三ヶ島地区の山林などでも進行していきます。

所沢市の誕生 昭和 25（1950）年、所沢に市制が施行されました。県内で 8 番目、人口は 42,000 人余りでした。5 年後の昭和 30（1955）年に、柳瀬村と三ヶ島村が編入され、現在の市域が成立しました。

基地返還運動 米軍が基地を使用していると、住民の雇用など経済効果がある一方で、交通事故や風紀上の問題が深刻でした。基地返還を求める声は昭和 34（1959）年頃から本格化し、運動の結果、昭和 46（1971）年に部分返還が実現しました。跡地には国、県、市の協議により公園、公共施設、住宅などが建設されました。

東京オリンピック 昭和 39（1964）年、戦後復興の象徴として開催された東京オリンピックで、柳瀬地区がクレイ射撃の会場に選ばれました。建設された射撃場は、昭和 42（1967）年の国体などでも使用され、その後昭和 47（1972）年に閉鎖されました。「オリンピック道路」の通称のある本郷交差点北の道路は、この時建設されたものです。



写真 1-31 飛行場の「天翔部隊」開拓地
(新所沢東地区)



写真 1-32 市制施行記念の山車まつり



写真 1-33 クレイ射撃場（昭和 39 年）



写真 1-34 在日米軍所沢基地六割返還式（昭和 46 年）

住宅都市所沢 昭和 32（1957）年の新所沢の開発を機に、所沢は首都圏のベッドタウンとして発展を始めます。各地で住宅開発が盛んになり、小手指や東所沢など駅を核にしたまちづくりや、松が丘や椿峰のような自然に隣接したまちづくりが進みました。人口は急激に増加し、その結果、学校など公共施設の建設が追いつかないほどでした。

所沢、全国区へ 人口が急増し右肩上がりの所沢に、昭和 54（1979）年、西武ライオンズ（当時）が進出します。同じ頃、所沢は「航空発祥の地」をきっかけ、「航空記念公園」や「プロペ通り」など航空にちなんだ名前が生まれます。昭和 57（1982）年には陸運支局が松井地区に開設されて所沢ナンバーの車が出現、所沢の知名度を全国に広げました。

環境への関心 平成 2（1990）年、市制施行 40 周年を迎えた所沢は、人口が 30 万人を超え、平和都市宣言の制定や海外の姉妹都市との交流など、成熟への道を歩んでいました。国民的アニメ映画「となりのトトロ」に、所沢ゆかりの地名が登場し、そこに描かれた美しい里山の風景は、狭山丘陵など身近な自然への関心を高める後押しとなりました。一方、平成 7（1995）年にダイオキシン類による環境問題が報道され、所沢の名はマイナスの意味で大きく注目されます。これがきっかけで全国的にダイオキシン類の有害性が問題になり、市は、全国初のダイオキシンを少なくし所沢にきれいな空気を取り戻すための条例など、さまざまな取組を重ねました。

平成から令和の時代へ 平成の時代は少子高齢化が加速しました。平成 30（2018）年の出生率は 1 桁台に落ち込み 65 歳以上の高齢者の割合は全人口の 4 分の 1 になりました。一方で、平成 23（2011）年 3 月 11 日の東日本大震災で所沢は震度 5 弱を観測し、地震による脅威を改めて感じる事となりました。また近年は集中豪雨による被害も例年心配されており、災害は身近な問題となっています。令和の時代は、こうした諸課題を乗り越えるための持続可能な地域社会づくりを目指しています。



写真 1-35 新所沢駅と新所沢団地（昭和 39 年空撮）



写真 1-36 ドーム化以前の西武球場（昭和 60 年）



写真 1-37 ナショナルトラスト 1 号地(トトロのふるさと基金)



写真 1-38 新所沢団地の計画停電(東日本大震災 平成 23 年)

6. 所沢ゆかりの人物

市にゆかりの歴史上の人物は表 1-9 のとおりです。俳人の斎藤俳小星、歌人の三ヶ島葎子、将棋士の福泉藤吉と大矢東吉、祭り囃子の創始者である古谷重松、寺子屋師匠の沢田泉山、哲学者の田中王堂など、『埼玉人物事典』に取り上げられ、文化人が多いといえます。このほか所沢飛行場関連の人々や所沢ゆかりの著名な人物も多く、今後人物の顕彰をしていく必要があります。

表 1-9 所沢ゆかりの人物

氏名 (生没年)	功績
よしだ やえもん 吉田 弥右衛門 (1700-1766)	甘藷（さつま芋）を広める 南永井村（現柳瀬地区）の名主。寛延 4（1751）年、江戸木挽町の川内屋八郎兵衛の仲介で、長男の弥左衛門を上総国志井津村（現千葉県市原市）へ派遣し、さつま芋を購入。購入したさつま芋を試作栽培し、近隣の村々にその栽培を広め、「川越いも」の基礎を築いた。
ふくいずみとうきち 福泉 藤吉 (1766-1837)	棋士 明和 3（1766）年に所沢村の紺屋に生まれ、寛政年間（1789-1801）から天保 8（1837）年に没するまで活躍した江戸時代の棋士である。天保 6（1835）年の将棋番付では西大関に格付けされ、当時家元以外の棋士で異例の七段を許されたという。全国の将棋愛好家の間で「所沢のとうきち」と呼ばれ、大変名の知れた存在であった。
さわ だ せんざん 沢田 泉山 (1823-1910)	「狭山学校」開設者 幕末期の寺子屋師匠。名を新五郎という。文政 6（1823）年に北入曽村（現狭山市）の本橋家に生まれ、24 歳の時に北野村（現小手指地区）沢田家の養子となった。その間、漢学・国学・算学・医学などを学ぶ。安政 2（1855）年に寺子屋兼私塾の「北広堂」を開き、明治 6（1873）年に「狭山学校」を開設。教授法に工夫を重ねて名声を博し、筆子・門人の数は 1,576 人を数えた。「北広堂」の子弟から、衆議院議長を務めた粕谷義三が出ている。
おお や とうきち 大矢 東吉 (1826-1892)	棋士 文政 9（1826）年に所沢村に生まれ、十代のとき福泉藤吉の墓前で入門を誓い、東吉を名乗って、幕末から明治時代にかけて活躍した棋士である。明治 10（1877）年の将棋番付では東大関、七段に格付けされている。全国の将棋愛好家の間で「所沢のとうきち」と呼ばれ、大変名の知れた存在であった。
ふる や じゅうまつ 古谷 重松 (1830-1891)	重松流祭囃子創始者 重松流（じゅうまりゅう）祭囃子の創始者。天保元（1830）年に所沢村に生まれた。生家は蒟蒻屋であり、兄とともに家業を営んでいたが、同所の麴屋を営む古谷源右衛門の養子となる。祭囃子を習得して、独自の奏法を編み出し、行商の傍ら各地で祭囃子を指導した。明治 7（1874）年に古谷重松太鼓連中が久保稲荷社（入間市）に奉納した絵馬に近隣の村名が書かれており、当時すでに、重松流は所沢を中心として多摩地域に広く伝承されていたと思われる。
た なか おうどう 田中 王堂 (1867-1932)	哲学者 本名は田中喜一。中富村（現富岡地区）の旧家に生まれる。15 歳のとき単身上京、東京英和学校などで学んだのち渡米。シカゴ大学でデューイの教えを受け明治 30（1897）年に帰国。翌年東京高等工業学校（東京工業大学の前身）の哲学教授となり、以後早稲田大学や立教大学の教壇に立つ。日本におけるプラグマティズムの先駆であり、王堂哲学と言われ論壇を賑わせた。
さいとうはいししょうせい 斎藤 俳小星 (1883-1964)	俳人 本名は斎藤徳蔵。所沢町に生まれ、祖父や姉たちの影響を受けて句作をはじめた。明治 34（1901）年頃から「ホトトギス」を購読、同 44（1911）年に高浜虚子の門下となり、その頃から「俳小星」を名乗る。天下の三農人の一人と称され、「逃水会」を結成して所沢周辺の俳句会の指導的地位を占め「俳小星句集」などの句集を上梓。昭和 39（1964）年所沢市俳句連盟の初代会長に就任する。

み か じ ま よ し こ 三ヶ島 葎子 (1886-1927)	歌人（歌集「吾木香」） 入間郡堀之内村（のちの三ヶ島村。現三ヶ島地区）生まれ。埼玉県女子師範学校（現埼玉大学）に学ぶ。東京府西多摩郡小宮村尋常高等小学校（現あきる野市）に教員として勤めながら、新詩社、青鞥社に入り、「女子文壇」、「青鞥」、「スバル」等に短歌を発表、与謝野晶子の指導を受けた。退職、結婚後は、原阿佐緒の紹介で島木赤彦の門に入り、「アララギ」に短歌を発表した。後に、古泉千樫に師事。大正10（1921）年に歌集『吾木香』を出版し、40年の生涯で6,000首以上の歌を残した。
ひ だ り ぼ く ぜん 左 卜 全 (1894-1971)	俳優（「七人の侍」ほか） 上京してアルバイトをしながら中学に通うが、学資が続かずに中退。大正3（1914）年帝国劇場歌劇部に合格し、オペラ歌手として歌唱法やダンスを学ぶ。昭和24（1949）年、今井正の「女の顔」で映画初出演。55歳の遅咲きデビューだったが、その演技が黒澤明に認められ、その後「醜聞」、「白痴」、「生きる」、「どん底」などに出演し、「七人の侍」でその地位を不動のものとした。昭和45（1970）年にレコード「老人と子供のポリカ」を出した頃から体調を崩し、同46（1971）年に死去した。歌人三ヶ島葎子は卜全の異母姉にあたる。
や ま じ し ん こ 山路 真護 (1900-1969)	洋画家 所沢町（現所沢地区）生まれ。昭和5（1930）年から同7（1932）年までパリに滞在し、エコール・ド・パリの画家たちと親交があった。滞在中、サロン・ドートンヌに入選。帰国後は二科展を中心に活動。昭和12（1937）年に、東京・ロンドン間の当時の飛行記録を作った朝日新聞社「神風」号の塗装デザインをした。昭和27（1952）年には全日空からの依頼で同社の社章をデザインした（ダ・ビンチの「スパイラル」に基づく）など、航空の歴史ともつながりが深い。



写真 1-39 山路真護画「巴里」

コラム

異なる世界で活躍した姉弟

所沢に異なる世界で活躍した姉弟がいました。歌人の三ヶ島葎子とその異母弟の俳優の左卜全です。生後間もなく生母の実家に預けられ、小学校卒業と同時に奉公に出され放浪生活を続けていた弟の卜全と、病を得ながらも小学校代用教員となって歌人として頭角をあらわした8つ違いの姉の葎子。

心身共に虚弱であった卜全は放浪生活の中で姉を頼り、葎子もまた、弟の放浪と苦悩は自己の病のためでもあると感じつつその行く末を案じていました。

自身も苦悩を抱え、歌作に昇華し続けた姉は、弟の俳優としての成功を見ることなくこの世を去ります。



写真 1-40 三ヶ島葎子

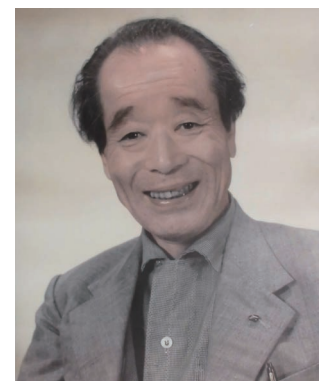


写真 1-41 左卜全